ＳＮＳ等に頼らない、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成を目指して

――　児童生徒・教職員・保護者に向けた指導・支援ツール「ハートフルプログラム」の作成と活用を通して　――

長期研修員　　小野　敦　　小倉　紀子

《研究の概要》

本研究では、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成を目指して、児童生徒・教職員・保護者の三者に向けた指導・支援ツール「ハートフルプログラム」を作成し、活用を図った。「ハートフルプログラム」は、ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さや人間関係づくりの必要性について共通理解を図り、指導・支援体制を構築するための資料と、「お悩み相談ロールプレイ」等を取り入れた学級活動の展開例やワークシート、児童生徒の人間関係づくりとその指導・支援を啓発するリーフレット等で構成されたプログラムである。本ツールを校内研修、学級活動（小学校高学年）、保護者会等で活用した。教職員と保護者の協力体制を整えた上で、児童生徒同士の支え合いを指導・支援し、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒を育成できることを明らかにした。

キーワード　【生徒指導　教育相談　人間関係づくり　互いに支え合う　学級活動　ＳＮＳ】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｆ０８－０１　平成３０年度　２６７集

Ⅰ　主題設定の理由

生徒指導提要（平成22年３月）では、「互いに協力し合い、よりよい人間関係を主体的に形成していこうとする人間関係づくり（中略）は、生徒指導の充実の基盤であり、かつ生徒指導の重要な目標の一つ」であるとし、「望ましい人間関係づくりは極めて重要」と述べている。また、小学校学習指導要領解説総則編（平成29年７月）及び中学校学習指導要領解説総則編（平成29年７月）では、児童（生徒）が、「よりよい人間関係を形成し，有意義で充実した学校生活を送る中で，（中略）生徒指導の充実を図ること」としている。このように生徒指導の充実を図る上で、人間関係づくりが重要視されている。

群馬県教育委員会の平成30年度学校教育の指針では「自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団」「互いに協力し合い、主体的によりよい人間関係を形成していこうとする集団」づくりを推奨している。また、平成29年11月に県教育長(義務教育課)から出された「児童生徒の被害等の未然防止について（通知)」では、「児童生徒がＳＮＳ等に頼らない人間関係づくりへの意識を高めていけるよう(中略)互いに認め合い、支え合うことのできるような意識の醸成を図る取組を進めていくこと」を求めている。さらに、平成30年４月に群馬県教育委員会事務局（高校教育課・特別支援教育課）より「ＳＮＳに頼らない人間関係づくり」に係る活動実施要項が示され、いじめ、問題行動及びＳＮＳの利用状況に起因する生徒の犯罪被害等を未然に防止することを目的とした取組が公立高校等で始められている。このことから、互いに支え合うことのできる児童生徒の育成が、ＳＮＳ等に頼らない人間関係づくりにつながると考える。

警察庁の「平成29年度におけるＳＮＳ等に起因する被害児童の現状と対策について」(平成30年４月）によると、青少年のスマートフォン等の所有・利用状況の増加とともにＳＮＳに起因する事案の被害児童数は、増加傾向にある。被害児童が被疑者と会った理由として、「優しかった、相談にのってくれた」「寂しかった」が全体の約４分の１を占めている。内閣府の「平成29年度版子供・若者白書」（平成29年）では、インターネット空間を自分の居場所だと感じている割合が62.1％と高い割合を占めていることが示されており、ＳＮＳ等に自分の居場所や相談相手を求めている児童生徒がいると考えられる。同白書では、「周囲と十分なコミュニケーションが取れずに孤立し、または、心を開いて悩みなどを相談できる相手がいないなどといった状況にある者もおり、（中略）ひとりで悩みを抱え込む状況が続くことにより、様々な問題を複合的に抱えた状態に陥ることが懸念される」とし、孤立を防ぐ手立てとして、「自分がほっとできる居心地の良い場所を持つとともに，何かあった時に支えとなってくれる人との関わりを築いておくことが大切である」と述べている。これらのことから、学校や家庭において、日頃から何でも安心して話せる環境を整えておくことが必要であることが分かる。

以上のことから、悩みを抱えたり、困ったりしたときに、心を開いて相談できるような互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成は、ＳＮＳ等に起因する被害を未然に防ぐ上で、喫緊の課題であると言える。児童生徒が、ＳＮＳ等に頼るのではなく、学校の友達、教職員や保護者といった身近な人に話したり、相談したりできる人間関係を築くためには、ＳＮＳ等の危険性や児童生徒の互いに支え合う人間関係づくりの必要性について、教職員が共通理解を図り、保護者の意識を高めることが重要である。そして、教職員と保護者の協力体制を整えて、児童生徒の人間関係づくりを指導・支援することで、学校や家庭において、児童生徒がより安心して話せる環境をつくることができると考える。

そこで、本研究では、児童生徒・教職員・保護者に向けた指導・支援ツール「ハートフルプログラム」を作成し活用することで、ＳＮＳ等に頼らない、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成を目指したいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

児童生徒・教職員・保護者に向けた指導・支援ツール「ハートフルプログラム」を作成し、活用することは、ＳＮＳ等に頼らない、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成を目指す上で有効であることを明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　ＳＮＳ等に頼らないとは

ＳＮＳ等は、大人だけでなく児童生徒にとっても、身近なコミュニケーションツールになってきており、利便性については評価されている面もあるが、ＳＮＳ等を起因とする犯罪が後を絶たない状況もある。本県でも、「ＳＮＳに頼らない人間関係づくり」が、推奨されている。

本研究では、ＳＮＳ等を使ってはいけないということではなく、ＳＮＳ等（アプリ、メール等を含む）を悪用する人物から児童生徒を守るという視点から「ＳＮＳ等に頼らない」という言葉を用いる。実生活の場で、日頃から悩みを相談できるような友達や保護者、教職員等の身近な人との望ましい人間関係を築くことで、ＳＮＳ等に頼らない人間関係づくりができると考える。

(2)　互いに支え合う人間関係とは

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成29年７月）では、児童の問題行動の要因について、「家庭や地域社会などにおける児童の人間関係の希薄化に伴う対人関係の在り方の未熟さが指摘されてきた」としている。その上で、「多様な他者と理解し合って協力し合える人間関係を形成することが一層重要になっている」と述べている。さらに、「様々な人間関係を経験させることが大切」であり、「よりよい人間関係の形成の指導として、社会的スキルを身に付けるための活動を効果的に取り入れることも考えられる」とし、学校現場での児童生徒の人間関係づくりの取組を求めている。

本研究では、困ったときや悩みを抱えたときに、安心して話したり心を開いて相談したりすることができ、それに対して親身になって一緒に考えていける身近な人との人間関係を、互いに支え合う人間関係と考える。

(3)　研究構想図

２　教材の概要

本研究では、児童生徒・教職員・保護者の三者に向けた指導・支援ツール「ハートフルプログラム」（図１）を電子データで作成し、活用する。三者それぞれに向けたプログラムを、「児童生徒プログラム」「教職員プログラム」「保護者プログラム」とし、ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さや人間関係づくりの必要性について共通理解を図り、指導・支援体制を構築するためのプレゼンテーション資料（以下プレゼン資料）やリーフレット、学級活動の展開例やワークシート、啓発リーフレット等で構成されている。

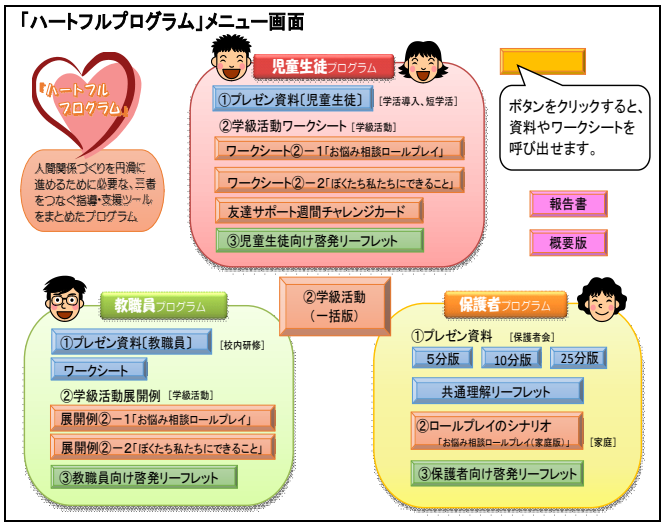


図１　「ハートフルプログラム」メニュー画面

(1)　「児童生徒プログラム」について

本プログラムは、身近な人との人間関係づくりに向けた学級活動２時間の構成になっている。

第１時では、導入で、児童生徒に対して、ＳＮＳ等の危険性と身近な友達や教職員、保護者との人間関係の大切さを理解するためのプレゼン資料を提示し、児童生徒が問題意識をもてるようにする。また、人間関係づくりへの意識を啓発する掲示物を繰り返し目にすることで、意識付けを図る。次に、「お悩み相談ロールプレイ」と題した活動を行う。児童生徒は、ワークシートを活用して、悩み相談のロールプレイを行い、親身になった聴き方とそうでない聴き方を疑似体験する。その上で、「相手が話しやすい聴き方のポイント」についてグループで共通理解を図る。これらの活動は、児童生徒が自他を尊重する態度や社会的スキルの大切さに気付く上でも効果的であると考える。事後活動では、「相手が話しやすい聴き方のポイント」を心掛けて生活し、家庭で「お悩み相談ロールプレイ」を実施する。

第２時では、日頃からできる人間関係づくりや悩んだり困ったりしている友達に対してできる「ぼくたち私たちにできること」についてグループで意見交換し、自分ができることについて意思決定する。事後活動「友達サポート週間」では、意思決定したことを実践する。実践後、友達の話を聴く際のヒントや人間関係で困ったときのＳＯＳの出し方、相談機関等を掲載した啓発リーフレットを配付する。児童生徒は、友達や保護者と関わる活動を通して自己を理解するとともに、身近な人との関わりを深め、互いに協力し合って望ましい人間関係を形成しようとする態度を養うことができる。また、家庭において親子で「お悩み相談ロールプレイ」を行い、感想を書く。親子で悩み相談を体験する活動を通して、互いの関係を振り返り、今後の関わりに生かすことができると考える。

(2)　「教職員プログラム」について

全教職員に向けた校内研修プレゼン資料と学級活動展開例及び啓発リーフレットで構成する。まず、プレゼン資料を活用し、ＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性について教職員間で共通理解を図り、児童生徒の人間関係づくりを指導・支援していこうとする意識を高める。その上で、学級活動「身近な人と支え合おう」の第１時「『お悩み相談ロールプレイ』をしよう」と第２時「『ぼくたち私たちにできること』をしよう」の事後活動を含めた展開例や授業の補助資料を活用する。そして、実践後も教職員が児童生徒の人間関係づくりを指導・支援していけるよう、啓発リーフレットを配付する。このリーフレットは、教職員が日頃の取組を振り返る項目、児童生徒や保護者との信頼関係や教職員の協働体制づくりのためのポイント等を紹介することで、今後の取組への参考となるものである。

(3)　「保護者プログラム」について

保護者会等で活用できる、ＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性を伝えるためのプレゼン資料と共通理解リーフレット、ロールプレイのシナリオ及び啓発リーフレットで構成する。まず、

教職員が、保護者に向けてプレゼンテーションをしたり、リーフレットを配付したりすることで、教職員と保護者の共通理解を図り、人間関係づくりに向けた協力を保護者に呼び掛ける。その上で、学級活動の事後活動として、保護者が親子でロールプレイを体験することで、我が子との関わりを振り返り、接し方を考えるとともに、今後も人間関係づくりを支援していこうとする意識を高める。加えて、高まった意識の継続を目指して、子供たちの悩みのサインや人間関係づくりを支援する際のヒント、学校との連携、困ったときの相談機関を掲載した啓発リーフレットを配付する。

Ⅳ　研究の計画と方法

１　実践の概要

指導・支援ツール「ハートフルプログラム」の活用として、教職員と高学年の児童及び保護者に向けて実践を行った。対象児童は、研究協力校（以下協力校）Ａが第６学年６学級（182名）、協力校Ｂが第５学年２学級（63名）である。

なお、下記に示す表のプログラム欄の番号は、前ページ図１の番号と対応している。

プログラム	実践日		実践場面等	主な活動・ねらい等
	協力校Ａ	協力校Ｂ		
教職員①	７月24日 教職員 40名	８月23日 教職員 17名	校内研修	・ＳＮＳ等の利用の現状と危険性や人間関係づくりの必要性について共通理解を図る。 ・「ハートフルプログラム」の概要を知る。
保護者①	10月11日	10月12日	リーフレット配付	・ＳＮＳ等の利用の現状と危険性、人間関係づくりの必要性を知る。
児童①②－1	10月12日、15日	10月17日	学級活動 第１時	・ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さについて知る。 ・「お悩み相談ロールプレイ」を行い、「相手が話しやすい聴き方のポイント」について、グループで共通理解を図る。
児童②－1 保護者②	学級活動 第１時後	学級活動 第１時後	事後活動①	・「相手が話しやすい聴き方のポイント」を心掛けて生活する。 ・家庭で保護者とロールプレイを行い、感想をワークシートに書く。（児童・保護者）
児童②－2	10月19日、22日	10月24日	学級活動 第２時	・友達と支え合うために、「ぼくたち私たちができること」についてグループで話し合う。 ・自分ができることについて意思決定する。
児童②－2	10月 15～19日 16～22日	10月 25～31日	事後活動②	・「友達サポート週間」（１週間）において、学級活動で意思決定したことを心掛けて生活する。
児童③	10月19日、22日	10月31日	リーフレット配付	・友達サポート週間を振り返る。 ・リーフレットを配付し、今後の人間関係づくりへの意識を高める。
保護者③	11月16日	10月31日	保護者会 リーフレット配付	・協力校Ａは、保護者会でのプレゼン後に配付、協力校Ｂは、児童を通じて配付し、今後も児童の人間関係づくりを支援していこうとする意識を高める。
教職員③	11月５日	11月５日	リーフレット配付	・リーフレットを配付し、今後も児童の人間関係づくりを指導・支援していこうとする意識を高める。

２　検証計画

検証	児童	教職員	保護者
視点１	学級活動の導入で提示した資料は、ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さを理解するために有効であったか。	校内研修で提示した資料は、ＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性について共通理解を図るために有効であったか。	提示した資料は、ＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性について共通理解を図るために有効であったか。
方法	アンケート	校内研修に参加した教職員へのアンケート、聞き取り	アンケート

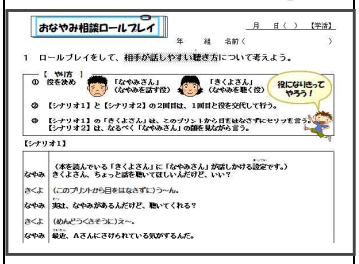
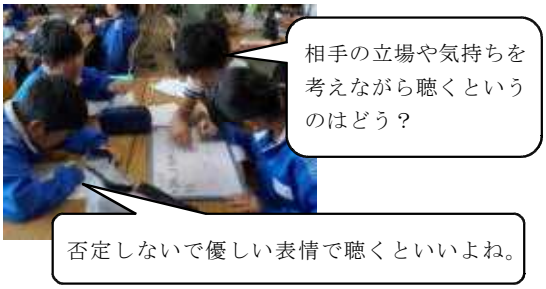
視点2	学級活動で「お悩み相談ロールプレイ」を行い、「友達サポート週間」で自分ができることに取り組んだことで、互いに支え合う活動を実践できたか。	「ハートフルプログラム」の構成は、互いに支え合う人間関係づくりができる児童生徒の育成に有効であったか。	親子でロールプレイをしたり、リーフレットを読んだりしたことは、これからも子供の互いに支え合う人間関係づくりを支援していこうという意識を高めるために有効であったか。
方法	アンケート、ワークシートの記述、事後活動の様子	学級活動や保護者の意識の啓発等に関わった教職員及び参観をした教職員へのアンケート、聞き取り	アンケート、ワークシートの記述

3　実践

(1)　児童生徒プログラム

①　②－１　学級活動（第１時）の実践

題材名	身近な人と支え合おう～「お悩み相談ロールプレイ」や「ぼくたち私たちにできること」をしよう～
第１時	身近な人と支え合おう～「お悩み相談ロールプレイ」をしよう～
本時のねらい	プレゼン資料によりＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さを理解し、悩み相談の疑似体験を通して「相手が話しやすい聴き方のポイント」について共通理解を図る。

	児童生徒プログラム	主な学習活動と児童の様子等	教師の気付き
事前	**ロールプレイのシナリオ（お手本用）**	**代表児童：ロールプレイのお手本児童への指導**	・演技力のある児童を選ぶと効果的である。
本時	**プレゼン資料** **［学級活動導入、短学活等］** 	**○プレゼン資料に沿ってＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さについて理解し、本時の議題を知る。** 	・ＳＮＳ等を起因とした事件の被害児童がいることやＳＮＳ等を居場所と感じる若者が多いことに児童が驚いていた。
		議題：友達と支え合うために、「相手が話しやすい聴き方のポイント」について考えよう。	
	ワークシート **「お悩み相談ロールプレイ」**  おなやみ相談ロールプレイ　月　日（　）【学活】 年　組　名前（　　） 1　ロールプレイをして、相手が話しやすい聴き方について考えよう。 【　やり方　】 ① 役をめめ　「なやみさん」（なやみを話す役）　「きくよさん」（なやみを聴く役）　役になりきってやろう！ ② 【シナリオ1】と【シナリオ2】の2回目は、1回目と役を交代して行う。 ③ 【シナリオ1】の「きくよさん」は、このプリントから目をはなさずにセリフを言う。【シナリオ2】は、なるべく「なやみさん」の顔を見ながら言う。 【シナリオ1】 なやみ　（本を読んでいる「きくよさん」に「なやみさん」が話しかける設定です。）きくよさん、ちょっと話を聴いてほしい人だけど、いい？ きくよ　（このプリントから目をはなさずにコラーん。 なやみ　実は、なやみがあるんだけど、聴いてくれる？ きくよ　（めんどうくさそうに）えー。 なやみ　最近、Ａさんにさけられている気がするんだ。	**○「お悩み相談ロールプレイ」で、親身になった聴き方とそうでない聴き方を体験する。** ロールプレイのお手本 ペアでのロールプレイ	・シナリオ２の親身になった聴き方では、児童の表情が明るかった。両方の聴き方を体験して、シナリオ２が話しやすいことを実感できた。 ・「目を見て」「うなずきながら」等の態度だけでなく「相手の気持ちを考えて」「相手の悩みに関心をもって」等の心情面をポイントとして挙げたグループが多かった。
	グループ用ワークシート **「相手が話しやすい聴き方のポイント」** 「相手が話しやすい聴き方のポイント」　組　番	**○グループで「相手が話しやすい聴き方のポイント」について話し合い、全体で発表する。**  	

<table>
<tr><td></td><td>SNSなどの被害にあわないために、相談できる相手をつくることが大切。だから友達との絆を大切にしたい
相談されたときは、相手の目を見て、やさしい声で相談してあげたい
【第１時の児童の振り返り】

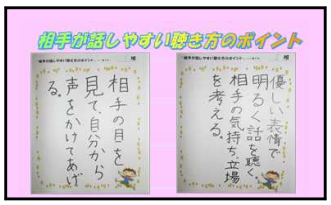
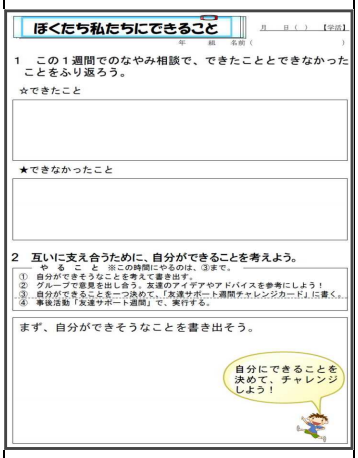
ワークシート
「お悩み相談ロールプレイ（家庭版）」（子供用）

</td><td>○本時の振り返りをし、事後活動について知る。
・「相手が話しやすい聴き方のポイント」を心掛けて生活しよう。
・家の人とロールプレイをしよう。</td><td>・児童は、ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さ、「相手が話しやすい聴き方のポイント」について振り返ることができた。</td></tr>
<tr><td>事後</td><td></td><td>○相手が話しやすい聴き方のポイント」を心掛けて、友達の話を聴くなどして生活する。
○家庭で、「お悩み相談ロールプレイ」を行う。

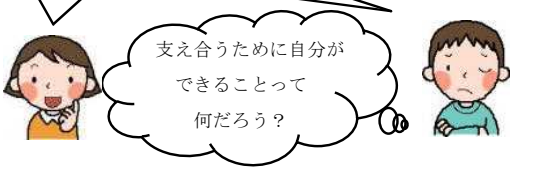
・ぼくは、悩みなどは親に言ったことも言おうとしたこともなかった。でもロールプレイでちゃんと聴いてもらえて、話そうかなと思った。
・今までお母さんに相談するのにいろいろ考えてしまって言いにくかったけど、ロールプレイをやってみて、悩みごとができたら、お母さんに気軽に相談したいと思った。【ロールプレイの児童の感想】</td><td>・話を聴く際、ポイントを意識していた。
・聴き方の大切さを再認識し、今後に生かそうという感想が多かった。聴き方に配慮する意識が高まった。
・親子をつなぐ一助となった。</td></tr>
</table>

②　②－２　学級活動（第２時）の実践

第２時	身近な人と支え合おう～「ぼくたち私たちにできること」をしよう～
本時のねらい	友達と支え合うために自分ができることについて考え、事後活動「友達サポート週間」につなげ、支え合う態度を養う。

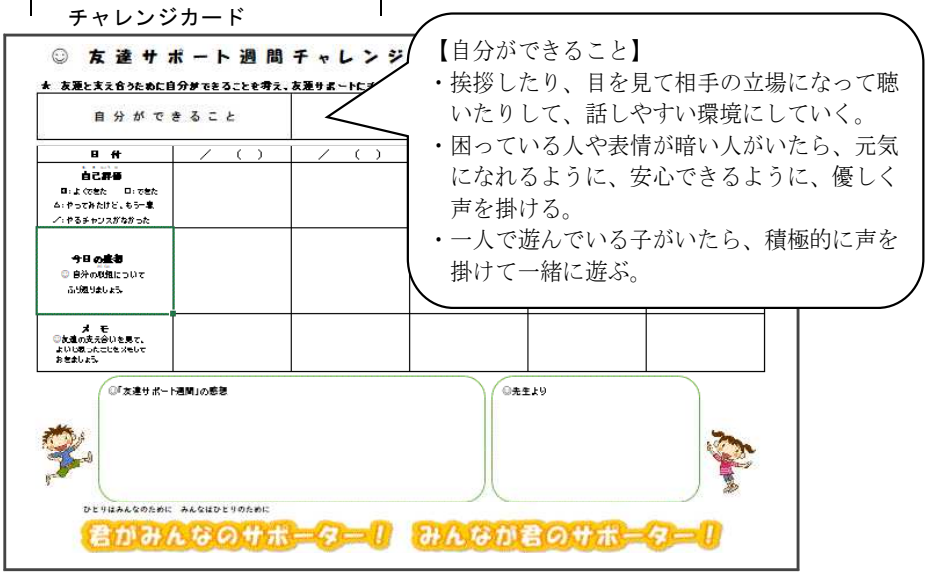
<table>
<tr><th></th><th>児童生徒プログラム</th><th>主な学習活動と児童の様子等</th><th>教師の気付き</th></tr>
<tr><td>事前</td><td> 
</td><td>○前時にグループで話し合った「相手が話しやすい聴き方のポイント」（グループでまとめ、掲示したもの）を見て参考にする。</td><td>・掲示することで、児童が繰り返し目にしたり、確認したりすることができた。</td></tr>
<tr><td>本時</td><td>ワークシート
「ぼくたち私たちにできること」
 
</td><td>○「お悩み相談ロールプレイ」と事後活動（「相手が話しやすい聴き方のポイント」を心掛けた生活、家庭でのロールプレイ）の様子を振り返り、本時のめあてを知る。

めあて：友達と支え合うために、「ぼくたち私たちにできること」を考え、「友達サポート週間」にチャレンジしよう。

○第１時後の１週間で、できたこととできなかったことを振り返り、自分にできることを考える。
 

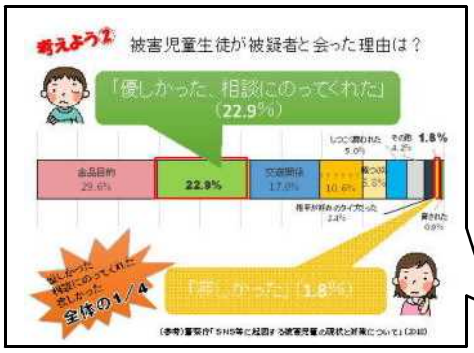
○グループでできそうなことを出し合い、友達の意見を参考にして「友達サポート週間」で自分が取り組むことを決める。</td><td>・ワークシートの記述を基に、意図的に指名するとよい。

・自分にできることを考える際は、教師が取り組むことを例示するとよい。友達と関わりをもとうとはしているものの、支え合いとしてもう少しという場合は、第１時後の取組で、できたことをレベルアップしてみるよう助</td></tr>
</table>

	友達サポート週間 チャレンジカード  【自分ができること】 ・挨拶したり、目を見て相手の立場になって聴いたりして、話しやすい環境にしていく。 ・困っている人や表情が暗い人がいたら、元気になれるように、安心できるように、優しく声を掛ける。 ・一人で遊んでいる子がいたら、積極的に声を掛けて一緒に遊ぶ。		言するとよい。 ・話合いの視点を与えるとグループでの話合いが深まる。（「自分から友達の様子に気付いて行動する内容か」「悩みがなくても日頃から取り組めるか」等）
		○本時の振り返りをし、事後活動「友達サポート週間」の取り組み方について知る。	
事後	児童生徒向け啓発リーフレット 	○第２時後の１週間、「友達サポート週間」で自分が決めたことに取り組み、毎日記録する。 困っている人がいたら、積極的に声をかけられた。これからも心掛けたいです。 普段は、しゃべらない友達としゃべれた。友達サポート週間が終わっても、友達を大切にし、何でも相談できる関係をたくさんつくっていきたいと思いました。 友達と支え合うことができた！ ○リーフレットを読んで、悩んだ時の参考にしたり、今後も支え合おうとする意欲を高めたりする。	・友達の様子を気に掛け、積極的に活動する児童が多かった。友達との関わりが広がった。 ・友達をサポートすることで、より相手の気持ちを理解することができ、「サポートを続けたい」という記述が多かった。

(2)　教職員プログラム

①　プレゼン資料（校内研修の実践）

プレゼン資料	主な活動と留意点及び教職員の様子
本研修のねらい ・ＳＮＳ等の利用の現状と危険性や人間関係づくりの必要性について共通理解を図る。 ・「ハートフルプログラム」の概要を知る。	
 ＳＮＳの危険性について考える	○ＳＮＳ等の利用の現状を知る。 ・データ資料により、国や県、協力校の利用状況等を知る。 ○ＳＮＳ等の危険性について考える。 ・ＳＮＳ等のイメージを共有し、ＳＮＳ等は便利で楽しいものだが、ＳＮＳ等を悪用する人もおり、使い方によっては危険であることを確認する。 ・被害児童生徒が被疑者と会った理由やインターネット空間を自分の居場所と感じている割合について考え、ＳＮＳ等に優しさや相談相手を求める児童生徒がいることを知る。

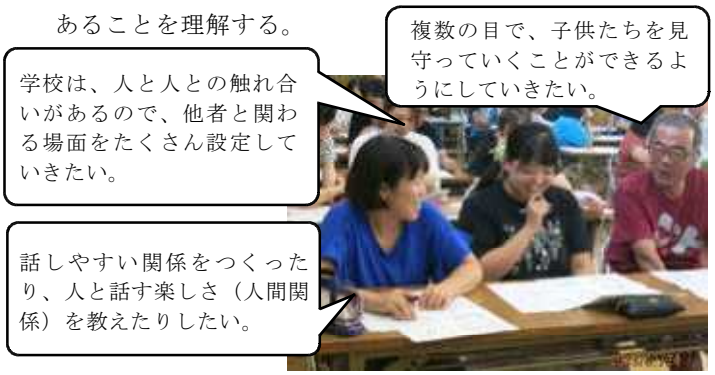
人間関係づくりの必要性について考える

ハートフルプログラムの概要を知る

○人間関係づくりの必要性について考える。

・身近にいる大人や友達に相談しない理由を話し合い、学校でも家庭でも、何でも話し合える雰囲気づくりが大切であることに気付く。

・どんな取組をしていけばよいのかを話し合い、学校や家庭において、身近な人との支え合う人間関係づくりが必要であることを理解する。



話合いの様子

○ハートフルプログラムの概要を知る。

・児童生徒、教職員、保護者による指導・支援体制づくりが人間関係づくりに必要であることを理解する。

② 学級活動（展開例等）

学級活動２時間分の展開例とワークシート等を作成し、各担任による学級活動の授業実践を行った。担任は、展開例を用いて、事前・本時・事後の流れを見通して実践に臨むことができた。第１時では、「お悩み相談ロールプレイ」で、悩み相談の疑似体験をし、相手が話しやすい聴き方のポイントについてグループで共通理解が図れるようにした。第２時では、自分ができることについて意思決定し、日頃からの支え合いを意識して取り組めるようにした。（詳細は、児童生徒プログラムの実践に記載。）

③ 啓発リーフレット

教職員向け啓発リーフレット（図２）を作成し、教職員へ配付した。教職員が日頃の取組を振り返る項目や人間関係づくりに向けた取組等を掲載することで、教職員が児童生徒への指導・支援を継続していこうとする意識を高められるようにした。さらに、児童や保護者との信頼関係、教職員の協働体制づくりのためのポイントや保護者会での実践例等を紹介することで、今後の取組へのヒントとなるようにした。

図２ 教職員向け
啓発リーフレット

(3) 保護者プログラム

① プレゼン資料・共通理解リーフレット

保護者にＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性を伝えるためのプレゼン資料と共通理解リーフレット（図３）を作成した。データ資料を精選し、提示方法を工夫することで、より身近な問題として捉え、理解を深められるようにした。プレゼン資料は、学校の実情に応じて選べるように「５分版」「10分版」「25分版」の三種類を発表原稿付きで作成した。

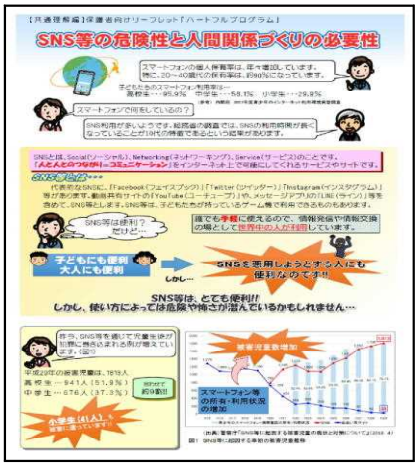


図３ 共通理解リーフレット

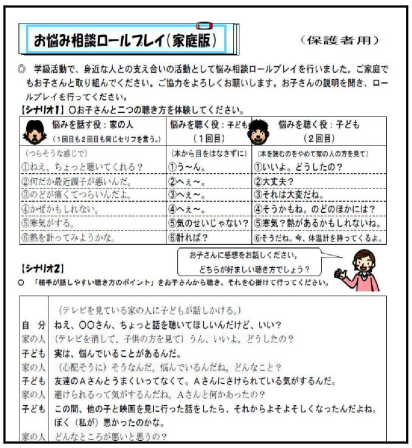
さらに、「10分版」「25分版」では、保護者が考える場面や話し合う場面を設定し、保護者同士の

交流も図れるようにした。また、リーフレットには保護者へのお願いも記載し、親子でのロールプレイ体験とワークシートへの感想の記入等、学級活動の取組への協力依頼を行った。

両校ともに学級活動前にリーフレットを配付した。協力校Ａでは、学級活動実践後の保護者会で、プレゼン資料（５分版）を活用し、プレゼンテーションを実施した。

②　ロールプレイのシナリオ「お悩み相談ロールプレイ（家庭版）」

学級活動の事後活動として、家庭において「お悩み相談ロールプレイ（家庭版）」を実施した。ロールプレイのシナリオ（図４）を配付するとともに、児童が保護者にロールプレイの方法や要点を説明するようにし、児童と保護者とのつながりをもてるように工夫した。ロールプレイ実施後に、ワークシート（子供用）へ保護者の方にも感想（図５）の記入を依頼した。


お悩み相談ロールプレイ（家庭版）　（保護者用）

◎ 学級活動で、身近な人との支え合いの活動として悩み相談ロールプレイを行いました。ご家庭でもお子さんと取り組んでください。ご協力をよろしくお願いします。お子さんの説明を聞き、ロールプレイを行ってください。

【シナリオ1】Ｏお子さんと二つの聴き方を体験してください。

悩みを話す役：家の人（１回目も２回目も同じセリフを言う。）	悩みを聴く役：子ども（１回目）	悩みを聴く役：子ども（２回目）
（うらそうな感じで）	（本から目をはなさずに）	（本を読むのをやめて家の人の方を見て）
①ねえ、ちょっと聴いてくれる？	①う～ん。	①いいよ。どうしたの？
②何だか最近調子が悪いんだ。	②へぇ～。	②大丈夫？
③のどが痛くてつらいんだよ。	③へぇ～。	③それは大変だね。
④かぜかもしれない。	④へぇ～。	④そうかもね。のどのほかには？
⑤寒気がする。	⑤気のせいじゃない？	⑤寒気？熱があるかもしれないね。
⑥熱を計ってみようかな。	⑥計れば？	⑥そうだね。今、体温計を持ってくるよ。

お子さんに感想をお聞かしください。どちらが好ましい聴き方でしょう？

【シナリオ2】

○「相手が話しやすい聴き方のポイント」をお子さんから聴き、それを心掛けて行ってください。

	（テレビを見ている家の人に子どもが話しかける。）
自　分	ねえ、○○さん、ちょっと話を聴いて欲しいんだけど、いい？
家の人	（テレビを消して、子供の方を見て）うん、いいよ。どうしたの？
子ども	実は、悩んでいることがあるんだ。
家の人	（心配そうに）そうなんだ。悩んでいるんだね。どんなこと？
子ども	友達のＡさんとうまくいってなくて、Ａさんにさけられている気がするんだ。
家の人	避けられるって気がするんだね。Ａさんと何かあったの？
子ども	この間、他の子と映画を見に行った話をしたら、それからよそよそしくなったんだよね。ぼく（私が）悪かったのかな。
家の人	どんなところが悪いと思うの？

図４　ロールプレイのシナリオ

・今回娘とロールプレイをさせていただき普段いかに子供の話を流して聞いているかが分かり反省した。忙しい中でも、少し手を止めて話を聞いてあげるようにしよう、子供の気持ちを考えながら相談に乗ろうと思った。
・どんなにささいな話題でも聴き方次第で相手に与える印象はがらりと変わることを強く感じた。いつでも、何でも、話しやすい、相談しやすい環境づくりを心掛けたいと思う。
・ロールプレイをしてみて、文章でシナリオを読んでいるだけのときと、実際に声に出し、相手が目の前にいて話すのとでは感じ方が全く違った。それと同じように、相手に見えないＳＮＳの世界では、互いの気持ちは見えてこないと思う。子供にもそれを感じてほしい。
・「相談する勇気」も大切。他の人の視点からだと案外、解決の近道となることもある。しかし、一番大事なのは、子供たちが相談してくれる「信頼される大人」が身近にいるということだと思う。

図５　お悩み相談ロールプレイ実施後の感想（保護者）

③　啓発リーフレット

保護者が、児童生徒の人間関係づくりの支援を継続しようとする意識を啓発するために、子供たちの悩みのサインや子供たちを支えるためのポイント、困ったときのヒントや相談機関を掲載した保護者向け啓発リーフレット（図６）を作成した。また、学校と家庭とが協力して児童生徒を支援していくことを呼び掛けることで、保護者の意識を高められるようにした。

図６　保護者向け啓発リーフレット

協力校Ａでは、保護者会（学年懇談会）で、保護者へ直接配付した。保護者会に参加できなかった家庭には、児童を通じて配付した。協力校Ｂでは、学級活動の実践後に児童を通じて保護者へ配付した。

Ⅴ　研究の結果と考察

１　児童生徒プログラムの有効性

(1)　プレゼン資料［学級活動導入］の活用

①　学級活動（第１時）の振り返りから

導入で、プレゼン資料を用いてＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さについて担任がプレゼンテーションを行い、共通理解を図った。ワークシートの「ＳＮＳ等の危険性について理解できましたか」という質問に対し、両校で「よく理解できた」（78.6%）と「理解できた」（19.7%）を合わ

せて98.3％となった。また、「人間関係の大切さについて理解できましたか」という質問に対し、両校で「よく理解できた」（83.8％）と「理解できた」（15.4％）を合わせて99.2％となった。感想には、「ＳＮＳの怖さが分かった。人間関係って大切だなと思った。これからはもっと友達と仲よくなって相談できる友達をつくりたい」等の記述が見られ、ＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さに気付いた内容を書く児童が多かった。プレゼン資料の中で、児童生徒の被害件数や事件の例、被害児童生徒が被疑者に会った理由等を知らせ、身近な人との人間関係の大切さを伝えたことで、ほとんどの児童がＳＮＳ等の危険性と人間関係の大切さについて理解できたものと考えられる。

(2)　支え合いの実践

①　学級活動の実践から

学級活動の第１時では、「お悩み相談ロールプレイ」を行い、「相手が話しやすい聴き方のポイント」を考えた。児童からは、「やっていることをやめて、相手の目を見て、うなずきながら聴く」「優しい表情や心配そうな表情で聴く」などの態度についてのポイントが挙がった。さらに、「相手の悩みに関心をもって聴く」「否定しないで、相手の気持ちを考えて聴く」など、相手の気持ちに寄り添う、心情面についてのポイントを挙げたグループも多かった。「ふり返り」の感想には、「自分が相談に乗る立場になったら、しっかりと優しく相談に乗ってあげたい」「相手の顔を見たり、優しい言い方をしたりすると、相手が話しやすいことが分かり、これからは今日習ったことをやっていきたい」等、友達を支えていこうという記述が見られた。親身になった聴き方とそうでない聴き方のロールプレイのお手本を見たり、両方の聴き方で、相談する側とされる側を体験したりしたことで、相手の聴き方によって話しやすさに大きな差があることを知り、より聴き方の大切さを実感することができた。

学級活動の第２時では、日頃からできる支え合いとして自分ができることを考え、事後活動「友達サポート週間」で実践した。児童の感想には、「相談に積極的に乗ることができた。喜んでもらえ、友達も自分もとてもいい気持ちになれた。助け合うのが楽しくなった！」「『友達サポート週間』が終わっても友達を大切にし、何でも相談できる関係をつくっていきたい」等、友達と支え合う関係の大切さに気付き、今後も続けていこうという記述が見られた。担任からは、「友達の様子を気に掛けて行動する様子が見られた」「友達との関わりが広がったようだ」という意見があった。児童は、支え合いに取り組むことで、人間関係の大切さを実感することができた。

今回は、２時間とも議題を担任から提示する形となった。本来は、児童から提示することが望ましいので、今後は、計画委員を機能させることで、児童主体の学級活動にしていく必要がある。

②　アンケート結果から

事前アンケート（図７）では、「悩みや困ったことがあるとき相談していますか」という質問に対して、両校で「している」が66.9％だった。学級活動の実践後の事後アンケート（図８）では、「悩みや困ったことがあるとき相談したいですか」という質問に対して、「とてもそう思う」（35.0％）と「そう思う」（46.2％）を合わせて81.2％となった。事前では、相談「していない」が両校で33.1％だったが、事後では相談したいと「あまり思わない」（15.4％）と「全く思わない」（3.4％）を合わせて18.8％となった。事前の相談しない理由と事後の相談したいと思わない理由（複数回答）を比較すると、相談の仕方や誰に相談すべきかが分からない、相談相手がいないという児童が事前には両校でのべ50人だったが、事後では約半数となった。また、

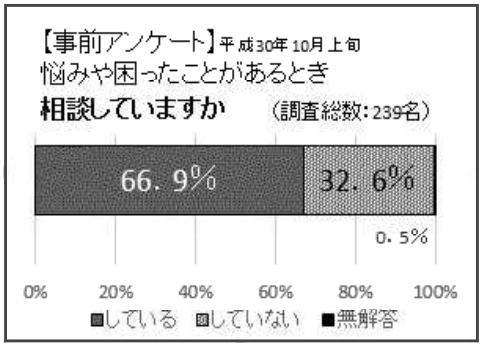


図７　相談に関する事前アンケート

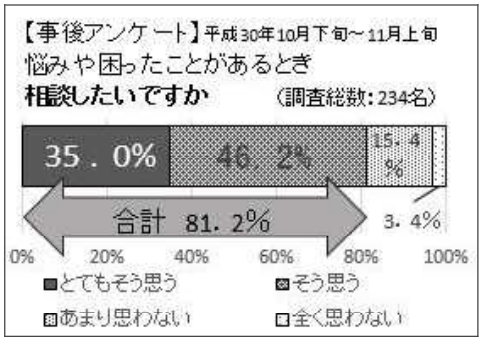


図８　相談に関する事後アンケート

事前の「誰に相談していますか」（複数回答）に対して、「友達」と答えた児童が両校で67.5％だったが、事後の「誰に相談したいですか」（複数回答）に対して、「友達」と答えた児童が両校で79.5％となり、12％増加した。そして、「これからも友達の相談に乗っていきたいと思いますか」という質問に対して、両校で「とてもそう思う」（66.8％）と「そう思う」（32.3％）を合わせて99.1％となった。学級活動での取組を通して「友達と支え合うことができましたか」という質問については、両校で「よくできた」（54.9％）と「できた」（39.1％）を合わせて、94.0％の児童が支え合いができたと答えた。学級活動で、人間関係の大切さについて理解した上で「お悩み相談ロールプレイ」を行い、「相手が話しやすい聴き方のポイント」について共通理解を図り、「友達サポート週間」に取り組んだことで、相談しやすい環境が整い、友達との支え合いが実践できた。

以上の①と②の結果から、学級活動での取組は、児童同士の支え合いの実践につながるとともに、今後の人間関係づくりへの意識を高めるために有効であったと考える。

２　教職員プログラムの有効性

(1)　プレゼン資料［校内研修］の活用

①　アンケート結果から

校内研修後に実施したアンケート（回答人数：57名）では、「ＳＮＳ等の利用の現状や危険性について、ご理解いただけましたか」という質問に対して、両校で「よく理解できた」（71.9％）と「理解できた」（28.1％）を合わせて100％となった。「ＳＮＳ等に頼らない人間関係づくりや互いに支え合う児童生徒の育成の必要性をご理解いただけましたか」という質問に対して、両校で「よく理解できた」（68.4％）と「理解できた」（31.6％）を合わせて100％となった。また、「ＳＮＳは便利な一方で、怖さもあるということを再認識した」という感想からＳＮＳ等は使い方によっては危険なものになるという理解につながったと考える。また、「友達同士、よい信頼関係を築いていけるようにしていきたい」「学校でも家庭でも何でも話し合える雰囲気づくりが大切」のように学校や家庭における人間関係づくりの必要性についての意見が得られた。

これらの結果から、校内研修資料（プレゼン資料）は、「ＳＮＳ等の利用の現状や危険性」及び「人間関係づくりの必要性」について教職員の理解につながる内容であったと考える。

②　研修中の様子と研修後の感想から

研修中の資料として、各種データを提示した。国や県のＳＮＳ等の利用の現状やＳＮＳ等に起因する事案等について、被害児童数の多さに驚いたり、納得してうなずいたりしている教職員の様子が見られた。研修後の感想では、「スマートフォン等の所持率のアンケート結果もあって、より身近に感じることができた」「高学年のＳＮＳの利用率の高さに驚いた」「ＳＮＳが子供たちにとって非常に身近であることを強く感じた」等の意見が得られた。協力校実施によるアンケート結果のデータを示したことで、より身近な問題として捉えることができたと考える。

また、研修中に各自で考える場面や少人数で話し合う場面を設定した。「学校としてどんな取組をしていけばよいか」について、「学校は、人と人との触れ合いがあるので、他者と関わる場面をたくさん設定する」「人と話す楽しさを教える」「話しやすい関係をつくる」「親との人間関係づくり」など、人間関係づくりに関わる意見が多かった。また、研修後の感想では、「考える場面が何度かあったので、考えながら聞くことができた」「まわりの先生方と、いろいろ話し合えたことがよかった」「具体的な方向性を考えるきっかけづくりの研修の場であった」等の意見が得られた。

これらのことから、各種データの提示により「ＳＮＳ等の危険性」をより身近に捉えることができ、各自で考える場面や少人数で話し合う場面を設定したことで教職員同士が意見を共有し、「人間関係づくりの必要性」についての理解を深めることができたと考える。

以上の①、②の結果から、校内研修資料（プレゼン資料）は、教職員がＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性について共通理解を図るために有効であったと考える。

(2)　「ハートフルプログラム」の構成について

①　アンケート結果から

学級活動の授業者及び参観者へのアンケート（回答人数：12名）では、「学級活動（事前・事後活動を含む）は、互いに支え合う児童生徒の育成に有効でしたか」という質問に対して、両校で「大変有効だった」（75.0％）と「有効だった」（25.0％）を合わせて100％となった。また、「保護者向けリーフレットや学級活動のロールプレイ（家庭版）は、『互いに支え合う児童生徒の育成』の支援体制づくりに有効でしたか」という質問に対して、両校で「大変有効だった」（58.3％）と「有効だった」（41.7％）を合わせて100％となった。記述式の回答では、「学級活動の実践は、学級の温かい雰囲気づくりに寄与した」「ロールプレイは、保護者の協力も得られたことで家庭でも考えるよい機会になったと思う」「児童生徒が、実践後も友達との支え合いを意識して生活している」等、学級活動の取組に対して有効性を感じる意見が多かった。

さらに、学級活動の実践後に行ったアンケート（回答人数：54名）では、「教職員向け啓発リーフレットは、児童生徒の支え合いの支援、教職員同士や保護者との支援体制づくりをする上で参考になりましたか」という質問に対して、両校で「とても参考になった」（57.4％）と「参考になった」（40.7％）を合わせて98.1％となった。記述式の回答では、「自分自身の普段の取組を見直すきっかけになった」「何かが起こらなくても時々このリーフレットを見て、人間関係を考えたい」「実践例等があり、分かりやすかった」等の自身の取組を振り返るとともに児童生徒の人間関係づくりへの指導・支援を継続していこうとする意識を感じられる意見が得られた。

これらの結果から、教職員にとって、「ハートフルプログラム」の構成は、「保護者との支援体制づくり」や「互いに支え合う児童生徒の育成」のために有効な手立てになったと考える。

３　保護者プログラムの有効性

(1)　プレゼン資料・共通理解リーフレット［保護者会・配付］の活用

①　アンケート結果から

協力校Ａ・Ｂにおいて、学級活動の実践前に保護者へ共通理解リーフレットの配付を行った。さらに、協力校Ａでは、学級活動の実践後に保護者会でプレゼン資料（５分版）を活用して保護者に向けた実践を行った。実践後に保護者に向けて行ったアンケート（回答人数：151名）で、「共通理解リーフレットを読んで、ＳＮＳ等の危険性と人間関係づくりの必要性について、ご理解いただけましたか」という質問に対して、協力校Ａでは「よく理解できた」（36.2％）と「理解できた」（62.8％）を合わせて99.0％となった。協力校Ｂでは「よく理解できた」（35.1％）と「理解できた」（63.2％）を合わせて98.3％となった。共通理解リーフレットは、「ＳＮＳ等の危険性や人間関係づくりの必要性」について共通理解を図る上で概ね有効であったと考える。しかし、協力校Ａでは学級活動後に５分でのプレゼンテーションを保護者に向けて行うことができたが、両校ともに学級活動前に実践を行うことができなった。十分な時間を設定し、保護者に向けて直接プレゼンテーションを行い、保護者同士で考えたり話し合ったりする場面をもつことで、保護者の理解を更に深めることができたのではないかと考えられる。

(2)　お悩み相談ロールプレイ（家庭版）の実施及び啓発リーフレットの配付

①　アンケート結果から

学級活動の実践後に保護者に向けて行ったアンケート（回答人数：151名）では、「親子で悩み相談ロールプレイをしたり、配付した啓発リーフレットを読んだりしたことで、これからもお子さんの互いに支え合う人間関係づくりを支援していこうと思われましたか」という質問に対して、両校で「とてもそう思った」（51.7％）と「そう思った」（48.3％）を合わせて100％となった。

②　ワークシートの記述から

「お悩み相談ロールプレイ（家庭版）」実施後の保護者の記述では、「普段いかに子供の話を流して聞いているかが分かり反省した。忙しい中でも、少し手を止めて話を聞いてあげるようにし、子供の気持ちを考えながら相談に乗ろうと思った」「親として心配なことの一つに子供の人間関係

づくりがある。家族でも子供の話に耳を傾け日々努力していきたい」「いつでも、何でも、話しやすい、相談しやすい環境づくりを心掛けたい」「『相談する勇気』も大切。他の人の視点からだと案外、解決の近道となることもある。しかし、一番大事なのは、子供たちが相談してくれる『信頼される大人』が身近にいるということだと思う」等の意見が得られた。これらのことから、親子のつながりに向けた実践として、保護者とのロールプレイで「親身になった聴き方とそうでない聴き方」を疑似体験したことにより、保護者が、日頃の親子の関わりを振り返り、親としての関わり方を考えるきっかけになった。さらに、家庭での安心して話せる環境づくりに対する意識や児童生徒の人間関係づくりへの支援に対する意識を高めることにつなげることができたと考える。

以上の①、②により親子で行ったロールプレイやリーフレットは、保護者が互いに支え合う人間関係づくりを支援していこうという意識を醸成するために有効であったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　「ハートフルプログラム」を活用することで、教職員と保護者の協力体制の下、児童の人間関係づくりに向けた実践を行うことができた。そして、児童は、互いに支え合う人間関係づくりへの意識、教職員・保護者は、児童の人間関係づくりに対する指導・支援の意識を高めることができた。

２　課題

○　計画委員を機能させ、児童生徒主体の学級活動になるよう工夫する必要がある。

○　ＳＮＳ等の種類や利用方法の多様化､児童生徒の利用状況の変化に対応したツールになるよう、随時、改善や修正を図る必要がある。

３　提言

○　学校全体として、「ハートフルプログラム」を組織的・継続的に活用することで、教職員・保護者の指導・支援体制を広げ、児童生徒の互いに支え合う人間関係づくりの意識を更に継続することにつながる。

○　中学校でも発達の段階を考慮して、「ハートフルプログラム」を活用することができる。

＜参考文献＞

・文部科学省　『生徒指導提要』　(2010)
・文部科学省　『小学校学習指導要領解説総則編』　(2017)
・文部科学省　『中学校学習指導要領解説総則編』　(2017)
・文部科学省　『小学校学習指導要領解説特別活動編』　(2018)
・内閣府　『平成29年度版子供・若者白書』　(2018)
・群馬県教育委員会　『平成30年度　学校教育の指針』　(2018)
・群馬県教育委員会　『第２期群馬県教育振興基本計画』　(2014)
・国立教育政策研究所　教育課程研究センター　編　『みんなで，よりよい学級・学校をつくる特別活動　小学校編』　国立教育政策研究所　教育課程研究センター（2018）
・河村　茂雄　品田　笑子　藤村　和雄　編著　『いま子どもたちに育てたい　学級ソーシャルスキル　小学校高学年』　図書文化社（2007）

＜担当指導主事＞

柴山　和宏　西田　麻規